

痴呆の都

ちほうみやこ
痴呆の都

はしいろまんぢう

(十二) 真実の壁

知り得た真実を浩幸に伝えようかやめようか、また、菊池に伝えようかやめようか、百恵はずっと考え込んでいた。やがて知らぬ間に季節は流れ、いつしか蝉時雨せみしぐれもコオロギの声に変わっていた。その間、何度か菊池にも会い、仕事でジャンⅡジャックにも会ってきたが、いずれも喉のどまで出かかったものの、どうしても言えなかった。

果たしてそれを伝えたところで何になるだろう——。完全に忘れ去られている過去を蒸し返したところで、悩むのは浩幸であり、菊池ではないか。それなら小松家の習ならいに従したがい、そのまま抛ほつておくのが二人にとって幸せな事ではなからうか。

——ジャンⅡジャックから内線うちせんで百恵に電話がかかってきたのは、そんな悩みの狭間はざまで、スタツフルームから見える透すき通った秋の空をぼんやり眺ながめていた時だった。

「百恵さん、おめでどう。ずいぶん時間がかかってしまいました、今日の会議で、特養棟屋上おくじょうに設置する遊園地の企画案が通りました。これで来年度予算に組み込まれます」

「ほんとうですか!」

百恵は悩みの事など忘れて思わず叫んだ。

「ただ一箇所懸案事項けんあんじこうがありまして、その相談をするために電話をしました。これからこちらに来れませんか?」

百恵はジャンⅡジャックに会うことに躊躇ちゅうちゆしたが、二人で知恵をしばらくながら育ててきた企画だけに、断るわけにもいかなかった。そうして久しぶりに山口医院の院長室へと足を運んだのである。

ジャンⅡジャックはいつものように、机に向かって仕事をしていた。そして中に入ってきた百恵の姿を見ると、嬉しうれしそうに接客用のソファに案内した。

「コーヒーでいいですか?」

「いいえ、おかまいなく……」

ジャンⅡジャックは何も言わずにコーヒーを百恵の前に置いた。そして、

「実は——」

と、企画書を指し示しながらその懸案を語りだした。こうして二人の最後の打ち合わせは三十分ほど続けられたのであった。そして懸案の結末をみると、ジャンⅡジャックが笑いな

がら言った。

「この企画を、百恵さんが最初に僕に話してくれた日の事を覚えてますか？」

百恵はなぜそんな質問をするのだろうと、警戒の表情でジャンⅡジャックをみつめた。

「寒い日だった。僕は百恵さんに『見て欲しい所がある』と言われ、雪の降る特別養護棟の屋上に連れていかれたんだ。本当は術後の体であんな寒いところに長時間出るのは危険だったのだけど、僕は山口浩幸であることを隠すために、実は必死になって寒さに耐えていたんだよ……」

百恵は始めて聞く話に警戒心を解きながら、

「ごめんなさい。ぜんぜん知らなかったから……」
と言った。

「いや、責めてるわけじゃない。当然のことです——」

ジャンⅡジャックは自分のコーヒーを一口飲んだ。

「『遊園地を作りたい！』って、あの時の輝く君の瞳が羨ましかった。実は特養棟の現実にも、僕も君と同じところで頭を悩ませていたんだ。それをあの一言で、君は僕の心の靄をいっぺんに吹き飛ばしてくれた。遊園地の構想の中に、悩みの解決策があるかもしれない」

て……」

「河上吾郎先生も言っていました。今の理想と現実のギャップは、浩幸さんでも悩むだろうって。それがあなたの成すべき仕事だったって。そして私たちの最大の宿題だって」

「河上さんに会ったの?——」

ジャンⅡジャックは驚いて百恵を見つめた。百恵はつい口を滑らせて河上の事を言ってしまったことに、早くも後悔していた。

「大丈夫。浩幸さんは死んだと思ってる。死人に口なしだって……」

ジャンⅡジャックは俄に笑い出した。

「確かに僕は死人に違いない——」

ジャンⅡジャックの愉快な笑い声に、やがて百恵もほっと微笑んだ。

「いや、ごめん。笑ってる場合じゃない。僕は百恵さんにお礼が言いたかったんだ。今後の特養棟の進むべき道に、確かな羅針盤を作ってくれたこと。ありがとう。心から感謝するよ」

「そんな……、私はただ……」

百恵は素直に喜んだ。そうして企画書をひとまとめにしたジャンⅡジャックは、修正項目の記載されたページを、FAXでコスモス園に送信した。

「来年の秋には完成するでしょう。遊園地に遊びに来る子どもたちの声が聞こえてくるよ
うだ」

ジャンⅡジャックは目を細めた。

「ところで……、河上さんのところへは何をしに行つたの？」

「まずい……」と、百恵は口をつぐんだ。更に彼は意地悪そうに笑つて言葉を継いだ。

「おおよそ見当はつきませんが……。あの菊池夢子さんの息子と、僕との関係を調べに
して？どうです、違いますか？——で、何か分かりましたか？」

「い、いえ……。なにも……」

焦つた様子あせの百恵の言葉に、ジャンⅡジャックは再び微笑んだ。

「やっぱり百恵さんは嘘をつくのが下手だ。何かわかつたんですね？」

こうなるとジャンⅡジャックの思うつぼだった。彼の巧みな話術たくに、どんどんぼろぼろが出始
めてしまう自分が情けなく思う百恵である。

「ほ、本当に何も思い出せなかつたんです」

「思い出せなかつた……？僕は『何かわかつたんですか』と聞いた。『思い出せなかつた』つ
て、何を？」

「だから、愛子さん……………」

百恵は慌あわてて口をおさえた。

「僕の母が何です？河上さんに、僕の母について何か聞いたのですね？」

執拗しつように聞き出そうとするジャンⅡジャックの巧みすぎる言葉が、百恵には憎にくらしかった。しかしジャンⅡジャックにしてみれば、あれほど昔の自分に似ている男の存在に、関心を持たないほうがおかしい。あれ以来気になって気になって、一時じつときも脳裏のうりから離はなれないのである。しかも、百恵が彼に思いを寄せ始めたとなれば尚更なほさらの事だった。

「ひよつとして、僕の母と菊池夢子さんとは何か関係があったとか……………」

百恵の視線しせんが宙ちゆうを泳いだ。

「百恵さん、何か分かったのですね？いったい何を知ったのですか。僕は知ってはいけない秘密ひみつなのですか？」

ジャンⅡジャックの攻めせめは、隠し通そうとする百恵の誠実な心に、ズケズケと土足で上がり込むような野蠻やばんさがあつた。それが秘密を聞き出そうとするジャンⅡジャックの口口ではあつたが、百恵は思わず口走つた。

「そつよ！知ってはいけないのよ！」

ジャンⅡジャックは呆れ顔で、ふて腐れたような言葉で百恵をつっぱねた。

「なんだ……。親族の関係を、第三者が知り得て、当事者の僕が知り得ないなんて、ずいぶんと安っぽい秘密なんだ」

百恵は「第三者」という言葉についかつとなつた。加えてジャンⅡジャックの冷たい言い回しにすっかり乗せられた。「なんでわかってくれないの！」という思いは、彼への愛情を裏返したところの憎悪へと姿を変えていた。

「そんなに知りたければ教えてやるわ！」

百恵はすっかり理性を忘れていた。感情に任せて、伝えようかやめようか、あれほど悩み抜いた真実を、まるでおはじきでもはじくような軽々しさで、次の言葉を口から滑らせたのだ。

「あなたのお母さんと夢子さんは双子の姉妹。そしてあなたと菊池さんとは異腹の兄弟！」瞬間、ジャンⅡジャックの両目に放心の気配を認めたとき、百恵ははっと言葉を止めた。

しまった――

言い終えたままの口の形を残し、両目を見開いた彼女はしばらくはその表情を変えることができなかった。伝えてはならない真実に、とてつもない大きな罪悪感を覚えずにはいられ

なかった。

秒針がどれほど移動したのだろう。やがて浩幸は、

「そんなはずは……、ありません……」

と、苦笑いを浮かべた。百恵は頭をうなだれて、とてもジャン・ジャックの顔を正視できない。

浩幸も敏感だから、殊百恵に対しては、嘘を言っているのか本当を言っているのか、判断するのに誤ることはなかった。やがて真実を受け入れた彼は、

「ほんとうなんですネ……」

と、大きなシヨックを隠せない様子であった。

「話していただけませんか？その話をつきとめた経緯を……」

先程の、百恵を挑発するような話し方とは打って変わって、ジャン・ジャックはいつもの口調に戻って静かに百恵を見つめた。観念した百恵は、やがてゆっくりその経緯を話し始めたのである。河上の家へ行ったところから、小布施の小松旧家で夢子が全てを思い出したところまで……。

「ちよつと待ってください。あのアルツハイマーの菊池夢子さんが、昔の事を思い出して、

話をしたというのですか？」

「はい——」

「信じられません……。アルツハイマーはその進行を遅らせることはできても、現代の医学では改善させることは不可能です。そんなことはありません」

「私の他に証人もいます。現在小松旧家に住んでいる岩崎あやさんという方です」

ジャンⅡジャックは眉間にシワをよせた。そして再び黙り込んで、最後までその話を聞いたのだった。

暫くは二人とも無言の時間を過ごした。

やがて、ジャンⅡジャックが神妙な顔付きで言った。

「もし、その話が本当だとしたら、僕はいままで兄がいることを知らずに生きてきた事になる。いったい何の巡り合わせなのか。いつそのことを彼を殺して、あの身体をいただきたいくらいだ……」

百恵はジャンⅡジャックが怖くなった。

「冗談ですよ。小心者の僕には、きっとそんな恐ろしいことはできません」

百恵は安堵して微笑んだ。

「彼のこと、好きになったのでしょうか？」

百恵は何も言わなかった。

「僕は百恵さんを苦しめた。でも僕と一緒にいれば、もっと苦しめてしまおうと思った。もし、僕の兄かも知れない菊池さんの息子さんと幸せになれるのなら、僕は心から祝福します。でも、兄と一緒にあって貴方あなたが苦しんだとしたら、僕は本当に彼を殺すかもしれません……。僕はもう、貴方の涙は見たくない」

「浩幸さん……」

「どうか、幸せになって下さい……」

百恵は言葉を失って、小さく笑っただけだった。